

第13回 新川和江賞

コロナ禍での表彰式

2月14日、市民情報センターで「第13回新川和江賞」未来をひらく詩のコンクール（主催：結城市、結城市教育委員会、（公財）結城市文化・スポーツ振興事業団）の表彰式が行われました。

新川和江賞は、名誉市民であり、ゆうき図書館の名誉館長である詩人・新川和江さんの名を冠して、平成20年度に創設された詩のコンクールです。

詩の創作活動を通じて、本市の文芸振興、創造性豊かな青少年の育成、さらには新たな才能を発掘したいという新川さんの思いは受け継がれ、今年も市内在住・在学の小・中・高校生から、2,152篇という多くの応募がありました。

その中から、新川和江賞（最優秀賞）に、結城第二高等学校1年 坂本七海さんの作品「いいかおり」が輝き、優秀賞には11人、優良賞には32人の作品が選ばれました。表彰式は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、例年より時間を短縮して

行われました。小林市長から賞状が授与された後、新川和江賞・優秀賞受賞者による受賞作品の朗読が行われ、最後に選考委員長である詩人・武子幸さんが、作品の講評と受賞者へのメッセージを送りました。

未来をひらく子どもたちへのメッセージ

武子選考委員長は、新型コロナウイルスの影響で、友だちと会えない寂しさを書いた詩のほかに、あたりまえの日々がどんなに大切かに気付き、毎日を大切にしようという思いが表れた詩が多くあったことを述べ、「これから詩を書き続けてください。」と応援の言葉を送りました。

新川和江賞を受賞して

新川和江賞を受賞した坂本さんは、「家族のことを考えて、この詩を書きました。このような素晴らしい賞をいただけてとても嬉しんです。」と感想を話し、会場は大きな拍手で包まれました。



新川和江賞（最優秀賞）

いいかおり

結城第二高等学校 1年 坂本 七海



夕方、家に帰る途中に
夕焼け小焼けのメロディーが聞こえると
なんだか早く家族に会いたくなって
歩く速度を速める
今日の夕飯はなんだろうとか考えながら
家のドアを開けると
お腹が減るいい香りがして
私の「ただいま」と
母の「おかえり」の声が重なる
もう匂いで分かっているのに
「今日の夕飯は何？」
とか聞いちやったりして
特別、裕福な家庭ではないけど
この生活が大好きで幸せ

新川和江さんプロフィール



昭和4年、結城郡絹川村（現結城市）小森に生まれる。結城高等女学校時代に、下館町（現筑西市）に疎開してきた詩人・西條八十と出会い、指導を受ける。昭和35年『季節の花詩集』で第9回小学館文学賞を受賞、その後、室生犀星詩人賞、現代詩人賞、詩歌文学館賞、丸山薫賞など数多くの賞を受賞し、その間日本現代詩人会理事長、会長を歴任。平成12年、勲四等瑞宝章を受章。平成13年、結城市名誉市民、平成16年、ゆうき図書館の開館に際し名誉館長に就任。平成24年、結城袖大使に就任。

武子幸さんプロフィール



昭和13年、東京都に生まれる。茨城県日立市で育ち、茨城大学卒業。詩誌『白亜紀』同人。作品に『蛞蝓（なめくじ）の夢』、『イエイツの影の下で』、『アイソポスの蛙』などがあり、近著に『モイライの眼差し』。（社）日本詩人クラブ元会長。茨城県芸術祭文学部門実行委員長。茨城新聞「詩壇」選者。平成30年度から「新川和江賞」未来をひらく詩のコンクール」選考委員長に就任。

選評

夕方になると「夕焼け小焼け」のメロディーが町に流れるのですね。それを聞くととても家が恋しくなります。台所で温かい夕飯を作っているお母さんの姿。七海さんもそんなのですね。賑やかな家族と明るい居間。夕飯の匂い。お腹がクーと鳴って急いでドアを開けて「ただいま」と言うと同時に母さんの「おかえり」。心が通い合っているね。匂いから夕飯が何か分かっているのに、夕飯は何と聞いた。家族の姿がもうたまらない。何よりもこの詩が素晴らしいのは、七海さんの澆刺（はつせき）とした息遣いが、詩の言葉から聞こえてくることです。生き生きとした生活の実感が溢れ出ていることです。心の底から言葉が生まれてきたので、詩が生きているのです。最後の二行がぐつと胸に響きました。

（武子幸）